

2018 年度夏期コース報告

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40 週間のレギュラーコースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は 2018 年 6 月 21 日（木）より 8 月 8 日（水）まで実施した。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースもレギュラーコースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に 2 年から 3 年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、夏期コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これもレギュラーコースと同様である。

近年は、前途有望であり上級日本語を集中的に学ぶことを熱望しながら、様々な事情でレギュラーコースへの入学が困難な学生が多い。そこで、そのようなレギュラーコース潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースはレギュラーコースの簡約版とも言うべき内容になっている¹。

一方で、夏期コースがレギュラーコースと大きく異なる特徴は、教員構成である。夏期コースでは、レギュラーコースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段は海外、主に米国で教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、イェール大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、スワスモア大学、デューク大学の教員が参加した。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度の受講者は 42 名であった。内訳は、大学院生または大学院入学予定 37 名、社会人 2 名、大学学部生が 3 名である。受講者は、コース初日の試験により習熟度や得手不得手の傾向が判定され、それに応じて 6 つのクラスに分けられる。各クラスは学生 6～8 名（標準 7 名）で、それぞれ、1 名の担任と 1 名の授業担当講師が運営した。

夏期コースはレギュラーコースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者のうち

2名は「サマー・レコメンデッド」（レギュラーコースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生）であった。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、全てのクラスにおいて、学生によるスピーチとそれに関するクラス全員での討論、NHK ニュースなどのビデオ素材あるいは市販の日本語教材を用いた聴き取りと内容報告の練習、日本語教科書や新聞、雑誌、書籍を用いた読解練習とそれを通じた語彙・表現力の増強、そして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『待遇表現』（The Japan Times）を用いた待遇表現の習得訓練が行われる。作文の宿題も定期的に課される。また、日本文化と社会を体験できる機会（校外学習）も5回設けられている。コースの最後には、学んだ日本語を生かし、学生が自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会が開かれる。夏期コースは成績や単位を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験、宿題の提出状況、そして口頭発表会によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行う。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話し、聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるといった大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間（校外学習を除く）の中でどの技能にどの程度の時間をかけるか、教材として何を用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が決定している。担任は、教育内容をコース開始前に計画するが、クラスの学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整を行う。

また、学生1人あたり全コースを通じて1時間、通常授業の時間枠の中で教員との個人授業の時間を設けている。学生1人あたり1時間というのは、教員から見れば授業7時間分ということである（1クラスを学生7名とした場合）。ある学生が教員の指導を受けている時間、他の学生は自習をする。この学生にとっての1時間、教員にとっての7時間をコースの中でどう配分し、その時間で何をするかはクラスの担任がそれぞれのカリキュラムや学生の要望に応じて決定している。例えば「夏柳」クラスでは計3回の面談を行い、中間試験と作文のフィードバック、そして期末発表のための原稿準備に活用した。

このほか、教材助手と大学生・大学院生インターン（横浜国立大学）、そして大学生ボランティア（国士舘大学）の協力を得て、授業時間外に自由会話の時間を設けた。今年の夏期コースでは、インターンの人数等の事情をかんがみ、授業以外でも日本語を話す時間を持つことが望ましいと教員が判断した、会話力の弱い学生のみが自由会話の活動に参加した。協力してくれたインターン生には、この場を借りて深く感謝を申し上げる。

校外学習の詳細等、上記以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

夏期コースは2～3年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、実際に集まってくる学生の能力は多様であり、読解教材のレベルや量などはクラスごとに異なる。また、文法の扱い方もクラスにより差がある。本節では、筆者が授業を担当した「夏柳」クラスを参考として挙げる。このクラスは上から3番目のレベルであり、学生には以下の特徴があった。

- ・ 初級～中級までの学習内容が概ね身につけているが、基本文法を部分的に忘れている
- ・ 作文である程度抽象的な内容を表現することはできるが、会話、特に、場面や話し相手に応じて柔軟に文体や表現を変える能力（敬語、文語、口語の使い分け）は未熟
- ・ 論文など、高度な文章の読解に時間がかかる
- ・ 社会問題について意見を交わすなどの複雑な会話に慣れておらず、使用語彙の幅が狭い

そこで、次のようにクラスの目標が設定された。

- ・ 基本的な文法を復習し、正しく使えるようにする
- ・ 中・上級の文型を身につけ、語彙力と表現力を高める
- ・ 論理的な文章の典型的な構造・表現をし、自分でもそのような文章を書けるようにする
- ・ 意見表明、反論、依頼など、相手との社会的関係に応じて繊細な配慮が求められる言語行動を失礼なく遂行できるようになる

1 時間目（9:40～10:30）

- ・ 単語テスト：当日扱われる教材に含まれる単語を出題
- ・ ミニスピーチ：1日1人が2分程度のスピーチを行い、クラス全員で意見交換
- ・ 待遇表現：前述のテキスト『待遇表現』の例を参考に適切な表現と発音、アクセント、イントネーションを身につけ、場面を設定してロールプレイ練習

2 時間目 (10:40～11:30)

- ・ 中・上級文型の導入と練習：東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）の文型解説を参考に、自分で例文を作りながら文型を学習
- ・ 初級文法の復習：センター独自教材を用いて、問題演習

3 時間目 (12:00～12:30)

- ・ 読解演習：課題の読み物の意味を確認しつつ、時間の許す限り内容について意見交換²。主に扱った記事は以下の通り。
 - ・ 上述『文化へのまなざし』テーマ3、4、5から抜粋
 - ・ 河竹登志夫『歌舞伎—その美と歴史—』から抜粋
 - ・ 川上弘美「神様」
 - ・ 村上春樹「納屋を焼く」
 - ・ 水田宗子・北田幸恵編『山姥たちの物語—女性の原型と語りなおし』から抜粋
 - ・ 鎌田東二『神道とは何か』から抜粋
 - ・ 桑原真人・川上淳『北海道の歴史がわかる本』から抜粋

4 時間目 (13:30～14:20)

- ・ ニュース報告・ディスカッション：予習として前日の NHK ニュースの最初の 20 分を視聴した上で、自分が興味を持ったニュースについてクラスで報告し、意見交換

4-3 他 4 クラスの概略

本節では、レベル順に各クラスの概略を述べる。

「夏海」

このクラスに集まった学生は日常的な会話や一般的な社会問題についての意見表明は既に十分可能であり、内容を正確に理解できているかを教師が確認しながらであれば、専門書を読めるレベルの読解力も身につけていた。大学学部生からキャリアの長い社会人までという幅広い年齢層、そして専門領域も様々な学生たちであったが、自分の専門の分野はもちろん、それ以外のテーマに関しても具体的・抽象的な議論が自在に行えるようになることを目標に指導した。

教員は学生 1 人当たり週に 2～3 回のスピーチを課した。テーマは時事問題や自分の専門分野、あるいは授業で読んだ教材についてなど、多岐に渡った。読解学習では市販の日本語教科書を一切使わず、短編小説や、社会学・人類学・民俗学・文学の専門書など、幅広いテーマ、ジャンルの読み物を扱った。1 日に授業でカバーした分量は 10 ページ程度と

非常に多い。他にも、映画を見て内容について討論する、上級学習者が誤りがちな文法事項（連用中止形の用い方など）を練習するなど、学生の知的好奇心を満たし、ニーズに応える柔軟な授業展開を行った。

「夏草」

プレイスメントテストの結果、上述の夏柳クラスとほぼ同等の日本語力の学生が集まり、授業も夏柳クラスと同様のレベル設定で行われた。読解教材としては『文化へのまなざし』や各種生教材を扱い、中級・上級レベルの読解ならびに文法の学習を行う一方で、本センター作成の『文法ノート』を用いて初級文法の復習を行った。多くの単語や文法表現を毎日学ぶが、それをとにかく授業の中で使ってみることと例文を作ることが大事であり、使ってみた結果としての間違いを通じて正しい用法を学ぶよう、教員は学生に繰り返し働きかけた。また、場面や話相手の立場に応じて適切な対応ができるよう、日常会話的な表現方法も含めた待遇表現の指導も積極的に行った。

「夏山」

日常会話は比較的スムーズにこなせるが、自分の専門や込み入った社会問題などについて論じるには語彙力も表現力も不足しており、初級文法の理解と定着も不十分な学生が集まった。読解教材としてはアカデミックジャパニーズ研究会編著『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（アルク）や『文化へのまなざし』等の市販教科書をはじめ、雑誌や書籍から抜粋した記事を用いた。これに加え、担任が独自に編集したテキストによる初級文法の復習やテレビニュースの視聴を課すなど、多様な活動を展開した。教員は、食をテーマとして読解教材を集め、昼休みを利用してクラスで実際におにぎりや寿司ケーキを作成して食べてみるという活動を行うなど、教材で学んだことを学生に実際に経験させ、生きた知識として身につけさせることを目指した。

「夏鳥」

夏鳥クラスの学生の日本語能力は総じて初級修了から中級初期程度といえるが、本年度は特に会話に慣れていない学生や、発音に難がある学生が目立った。基礎を修正して固めつつ、とにかく話す練習をし、高度な日本語運用能力を積み上げていくことが本クラスの目的である。

文法のテキストとして、本クラス独自の文法・表現パッケージを用いた。読解の授業では、岡・筒井・近藤・江森・花井・石川『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』（くろしお出版）や先述の『留学生の日本語③』、あるいはそれらに関連して担当教員の選定した生教材のほか、コース後半では学生が自分の専門や関心に応じて選んだ記事や小説などを積極的に使い、読解の難易度に負けずに読み通す意欲を学生から引き

出した。

期末発表の準備と練習には長い時間が必要となり強い心理的負担も伴ったが、教員の粘り強いサポートにより、全ての学生が、自分たちの専門について詳しく発表することができた。

「夏空」

本クラスでは、学生の会話力の弱さと初級文法の定着不足が顕著であり、単純な発話もおぼつかない中、まずは基本文法と授業で学んだ単語・表現を用いて単文が正確に産出できるようにすることを目標とした。

文法の授業のためには友松悦子『初級日本語文法総まとめポイント 20』（スリーエーネットワーク）、読解の授業のためには『留学生の日本語①』とスリーエーネットワーク『中級を学ぼう 中級中期』を用いた。『留学生の日本語①』は会話や作文の指導にも活用した。また、司馬遼太郎「21世紀に生きる君たちへ」などの文章を用い、速読の練習も行った。

学生、教員ともに期末発表の準備には夏鳥クラス以上に苦労したが、当日の発表は6週間の飛躍的な上達を証明した。

5 受講者によるコース評価

今年度受講者のアンケートは受講者42名のうち35名から回答を得た。建設的なコメントとして「期間がもう少し長いほうがいい」「校外学習の回数が多い」「会話練習の時間が少ない」といった批判は見られたものの、コースの4段階評価をExcellentとした者は26名、Goodとした者は8名、Fairとした者は1名、Poorとした者はゼロであり、教育内容と教職員に対する異例に高いレベルの満足度が伺える。また、回答者35名のうち33名がIUCの夏期コースを他の学生に推薦する意志を表明している³。校外学習に対する満足度も極めて高い。

6 おわりに

今年の夏期コースは各クラスの教育活動の充実と学生の満足度の高さが著しく、大成功に終わったといえる。IUC夏期コースの受講者は、この夏で何とか日本語をものにしたいという意欲（あるいは義務感）が強いことから、例年、コースの運営や教育活動に対して厳しい要求を突きつけてくる。そのような中、今年度のコースが学生からきわめて高い評価を得ることができたのは、各教員が、学生の要求に柔軟に対応しながらも、あくまで学生の日本語能力向上のために力強いリーダーシップのもとで教育活動を行った結果に他ならない。

一方で、コース全体の運営上の問題がなかったとは言えない。今夏の横浜は、他の多くの地域と同じく命に関わるほどの暑さに見舞われたが、7月20日の校外学習（「東京の日。」稿末の資料参照）もそのような中で挙げてしまった。参加を無理強いしなかったものの、校外学習自体を中止するという選択肢を検討するべきであった。今回のような異常天候を含めた様々なリスクに備え、危機管理に関するガイドラインを定めるべきであろう。

今後も、日本語能力の向上を願う意欲的な学生のニーズを満たす密度の濃い教育と、校外学習等諸活動の充実を追求していくことが、夏期コースに課せられた使命であると考えている。

(あきざわ ともたろう / 2010～2018年度夏期コース主任)

注

- 1 ただし、レギュラーコースで必須科目である SKIP (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは行わなかった。学生には、授業以外にもし時間があれば、本センター発行の『[Kanji in Context \[改訂新版\]](#)』とその Web アプリケーション版である [WebKIC](#) を用いて常用漢字の学習をするよう勧めた。
- 2 この時間には、校外学習で座禅や歌舞伎鑑賞を行う下準備として、関連する読み物やビデオを扱ったり、学生自身の調査を報告させたりといった活動も行なった。
- 3 Yes と回答しなかった者の 1 名は No、もう 1 名は「学生の目的によって異なる」とそれぞれ回答した。

資料：2018年度夏期コース 校外学習等

6月

- 21 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験（筆記、聴解、会話）（9:40～12:00）
- 22 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練（9:40～12:30）、歓迎会（12:40～14:30）
- 25 (月) 授業開始
- 29 (金) 校外学習① 横浜の日 4班に分かれ横浜市内を見学
 - A. キリンビール工場、B. 海外移住資料館、C. 日本郵船歴史博物館
 - D. 横浜地方裁判所

7月

- 5 (金) 校外学習② 鎌倉の日 円覚寺座禅研修（午後は各クラスで鎌倉散策）

- 10 (火) 校外学習③ 歌舞伎鑑賞教室「日本振袖始」
- 13 (金) 中間試験 (9:40~12:30)
- 20 (金) 校外学習④ 東京の日 3班に分かれ東京を見学
 - A. 東京国立博物館、B. 迎賓館赤坂離宮、C. 明治神宮
- 27 (金) 校外学習⑤ クラス単位で自由行動 (崎陽軒横浜工場見学、茶道体験学習など)

8月

- 6 (月) 最終試験 (9:40~12:30) 午後は発表会準備
- 7 (火) 口頭発表会 (9:40~14:20)
 - 1人あたり質疑応答を含め15分、3箇所に分かれ同時開催
- 8 (水) クラス担任との個人面談 (9:40~12:30)、修了式と祝賀会 (12:30~14:30)